天　界

第百五號　（第十卷）　昭和四年十二月

1929年を送る

（卷頭言）

もはや今1929年も殘り少なになつた．ふり返つて此の一年を顧れば，いろんな事に於いて多忙な年であつたことが思ひ出される．

世界の天文學上から見て，今年は比較的珍らしい天象の少なかつた年であつて，遊星界も，彗星界も，また恒星の大宇宙に於いても，何も大した驚異は無く，只，落ち付いた，健實な歩みを以つて學術の進歩が續けられたといふ一言に盡きるやうであるが，此の中にあつて，只一つの事件は，例の南洋に於ける長時間の皆既日食であつた．列强6ヶ國の學術を代表する合計14個の觀測隊が遠近から集まつて，日食の寫眞撮影を競つた事は，永久に此の1929年を記念する一事件であるが，偶然にも此等の觀測隊が何れも皆多少の雲に惱まされて，所謂100％の觀測成績を擧げ得なかつたことは實に惜しむべき不幸であつた．しかし，我が日本から珍らしく派遣された二つの隊が此れに參加した事は，近年の天文學史を賑はす一資料であるし，尙ほ我が京都帝國大學隊の80％の成功は大に意を强うするものである．

我が國内の天文界を見るに，年初には學界の元老新城博士が帝大總長に擧げられたことに，京都に花山天文臺の新設備が完成した事は，共に特筆すべき點である．此等の事は，何れも我が「天界」誌上に報導評論した所であつて，讀者の前に今更こと々々しく述べる必要は無い．

花山天文臺が出來上つて茲に僅かに二ヶ月を過したのみであるが，此の

天文臺の觀測器械設備が種々の方面から見て新しく，又，優秀である事實は，多少でも天文の事の辨へてゐる人が皆認める所であるし，其れのみでなく，花山頂から見える澄みきつた大空の星々の美ミ，又，脚下に展開する遠近諸方面の麗しい景色ミは，ひろく通俗の人々の中にも傳へられて，毎日曜や祭日休日なぞは言ふに及ばず，其の他の週日の，晴雨に拘らず，常に多數の人々が散策にやつて來る有樣は，恰もこゝに一つの新しい名所が出來た如くである．流石に京洛の地は我が日本の古い歷史を背景ミする文化の中心であるこミを肯かせる．此うした地の利を得て，花山天文臺が學俗間のひろい注意を惹く事實は，現代の學術ミ一般民衆ミを近づける好機會ミしての新しい吾人の經驗であるミ共に，同じ意味に於いて此れが，今後の理學文化の發達の階梯上，重要な一紀元ミなるらしくも豫感される．

東西兩京の帝國大學に多くの若きアストロノマーたちが，全國から，集まつて來る有樣も見事なものである．最近三四年は，毎年の學年初期に，天文研究の志望者に對して選拔試驗を行はざるを得ないミは，世界の何れの國に於いても絕對に見られない現象であつて，世に謂ふ物質生活の盛んな今の時代に，我が日本の將來の精神力が如何に偉大なるものであるかを雄辯に物語つてゐるわけでもある．國民の精神の奧底に，學の實用非實用の區別を超越して，止むに止まれぬ心から，大宇宙の直接研究を志ざす或る衝動の存在するこミは，誠に，貴しミも貴い事實である．只望むらくは，此等の若き學徒が，大學での業を卒へて，それ々々適當な機會を見出し，天文研究の初志を亂されずに，進む道を進まんこミを!!

天文の趣味が，最近，年一年ミ，人の世の種々相に現はれて來てゐるこミは，亦，著しい事實である．しかし，中にも此の趣味が最も廣い意味の民衆の間に廣まつて行く一方，世の有識者乃至文化的指導者を自任する教育家たちの間に，比較的熱心の足りないやうな傾向が見えるのは，可なり考へさせられる問題である．吾人はこゝに於いて今より約二十年前の我が國に於ける文藝思想興隆期の或る社會相を想起しつゝ，今後の理學文化發展時代に於いて，教育者が又々立ち遲れの經驗をくり返すのではないかミ杞憂するものである．